【タイトル】
お通しにパインのテキーラ

【著者名】
山田　有佳

【あらすじ】
ある会社員の男は、ふと気が付くと洞窟のような奇妙な内観のバーに迷い込んでいた。混乱する記憶の中、男は勧められたテキーラを飲み、短い夢を見る。

【概要】
お酒を飲んで現実感を失った若者が、短い夢を見て家に帰る小さなお話です。「飲酒」による「感情の抑制」と「現実感の喪失」を書きたくて書きました。

【字数】
2417 字

ふとあたりを見回すと、ハリボテの洞窟に迷い込んでいた。テーマパークのようなつるつるとした質感の岩壁に、まばらに蝋燭の灯が灯り、プラスチックのキノコが壁一面に繁っている。
「お通しにテキーラか、ミックスナッツお選びいただけまーす」
言われて初めて、自分がバーカウンターに座っていたことに気がついた。暖かいおしぼりで手を拭きながらきょろきょろとあたりを見回すと、年配のカップルが一組と、自分のような一人客が二名ほど、離れて弧の字型のカウンターに座っている。
（お通しにテキーラ？）
髪を高い位置で一つにまとめた、金髪の若い女性の店員が、こともなげに真っ直ぐこちらを見つめている。「じゃ、じゃあテキーラで」と顔色を伺いながら返事をすると、醤油皿のように各席に積み上げられたショットグラスを一つひっくり返され、冷えたテキーラを目の前で勢いよくなみなみ注がれた。パイナップルを一切れ、グラスのふちに蓋をするようにして乗せられて、どうぞと一瞥される。
まず、ここはどこだ。
つい数時間前まで職場の友人たちと食事をしていて、自宅に向かい電車に乗ったところまでは覚えている。渋谷駅で降りたのは覚えているから、そこからはほど遠くない立地のはずだ。
酒を飲みに来たのだろうか？ひとりで？目をつぶって思い起こしてみると、そういえば普段からひとりでもお酒をよく嗜んでいたような気もする。薄暗い店内で、空のジョッキグラスを満足気に並べる自分の姿は容易に想像できる。記憶を辿る限りでは、自分はひょっとして、かなりの

酒好きなのかもしれなかった。
しかし現実として、目の前に出されたこのテキーラの処理の仕方はわからない、と思った。
「あの…これ、どうやって飲むんですか？」
なんでわかんねーのに頼んだんだ、とも言いたげに、店員の眉間がぴくりと動いた気がしたが、グラスを拭いていた手を止めてくれる。
「えっとですね、まずこれをぐいって飲んで、それからパイナップルをかじってください。ほんとは柑橘類とかが多いんで、これはうちオリジナルですけど」
「なるほど」
「あの…、前もうち来てませんでしたっけ？」
じっと顔を覗き込まれる。確信がありそうだった。
えっそんなことあるか？こんなインパクトしかない店、一度来て覚えてないことなんてあるか？
周りをもう一度きょろきょろと見回したが、やはり覚えのある空間には思えなかった。
「いや…？人違いだと、思いますが…」
店員のつるりとした額にさらに皺が食い込む。心底不可解だという顔をして、諦めたように作業に戻っていった。
目の前には（おそらく）初めてのテキーラ。
パイナップルの蓋をどけて、グラスの中身を一気に喉に流し込む。味わう前に除けたパイナップルを口に放り込むと、ガムシロップのような甘い風味が鼻を抜けていき、遅れて喉の奥がかっと熱くなった。南国。生ぬるく湿度が高いが開放的な独特の爽快感に喉を焼かれ、気持ちよかった。

「おいしい！」
「…あなた、たぶん酒強いと思いますよ。次、何飲まれます？」
店員が先ほどの怪訝顔のままこちらを見つめている。あ、なんだ。あの顔は別に普段からあの顔なんだ。
ちかちかとソフトフォーカスのフィルターがかかっては消え、かかっては消える。次の注文が考える前に口から滑り出た。
プラスチックのキノコたちが胞子を撒き散らしながらぽうぽうと発光していて、蝋燭の火は視界の片隅でまた時間を巻き戻し、初めから燃え直そうとしていた。

***

進めども進めども、霧で前が見えない。湿度が高いのに、どこか心地が良くて涼しい感じ。ドライアイスの煙の中にいるみたいだ。
すっ、と目の前に、始めから側にあったかのように、一筋の小川が流れている。霧で深さは測れないが、一隻の小舟が目の前をゆらゆらと揺れていた。
（あなたの「かんじょう」をあらってあげる…）
小柄な女性が、舟に乗っている。
霧の上、薄いヴェールのようなものをまとっているようだが、見覚えのある女性に思えた。
ふわふわの黒髪をぽりぽりとかきながら、彼女が片手で手を振った。もう片方の手には、片手

で持つには少し大きすぎるぐらいの、いびつな果物のようなものが握られている。

（「かんじょう」は「こころ」にあるでしょう…）

声をかけようとするが、言葉が見つからない。

小川に足を踏み入れると、歩いて進むことができる程度には水深は浅い。霧を掻き分け彼女の下へ辿り着くと、小川を燻らせるようにして洗っていたその果物が自分の足元に転がった。

みずみずしい色艶を纏った、生きた心臓だった。

＊＊＊

ガクン、と足を取られた感覚がして飛び起きる。浅い呼吸を整えると、ここはいつものワンルームのソファで、肉体はきちんと陸の上にいて、安全だった。

また寝落ちしてしまった。昨日はそんなに飲んだつもりはないのだが、家路までの細やかな足取りは思い出せない。渋谷駅を降りたところまでは、はっきりと覚えているのだが…。

新品の水とタバコは机の上にあったので、昨日の自分に感謝の一礼をして、水を半分飲み干しタバコに火をつける。

テレビをつけると朝の天気予報が流れたので、朝だとわかった。

迎え酒はアル中の始まりだと誰かが言っていたので、この部屋には中身の入った酒瓶はひとつもない。作業ができないほど雑多にテーブルに並ぶのは、すべて空の酒瓶だった。

ところどころ、花を活けている。仕事をしながら花屋に立ち寄るのは難しく、うなだれた花弁としなやかな花弁が混在していたが、それでよかった。花があれば、瓶の空虚は埋まるのだ。

酒の巧妙は、現実と非現実の境界を、不規則な形で曖昧にできるところだと思っている。

ここ最近、夢で見た内容か現実の出来事か、よくわからなくなってしまうことが本当に多くなった。

加齢か、自分の見た夢のリアリティが強すぎるのかはわからないが、まあいずれにしても水とタバコを買って家に帰って来れるぐらいなのだから、心配はいらないだろう。十時になったら、花屋に行こう。